



2007
平成19年

9

誌面に掲載した記事・写真等の無断複製・転載等はお断りします。お問い合わせ・ご意見は狛江市市民協働課へ

発行 ● 狛江市市民協働課
〒201-8585 狛江市和泉本町 1-1-5
☎ 3430-1111 FAX3430-6870
Email=wacco@city.komae.lg.jp
編集・制作 ● 特定非営利活動法人 k-press
〒201-0012 狛江市和泉 3-2-16
プランツベルツ 201
☎ 3430-6617 FAX3430-6743
Email=wacco@k-press.net

住民の命と健康を守るため奮闘 医療機関



慈恵第三病院 中央棟完成から2年後の航空写真。右は都営狛江住宅 1972年



病院開業 1950年
慈恵医大病院開業当時の建物と職員

住民の命と健康を守るために欠かせない医療機関だが、戦前の狛江には銀行町(東和泉)に病院が1軒しかなかった。戦後の昭和21年に2軒目、22年に3軒目の病院が開業したが、当時はほとんどの科目の診療を行い、なかには馬の目の手術をしたという農村地帯らしい話もある。25年に市内最大の医療機関・慈恵医科大



学附属東京病院分院(当時)が開業。29年には法定伝染病患者の収容・治療を行う平和病院が慈恵第三病院内に開設された(57年閉院)。30年代に入り都市化による人口増につれ病院が増え、地域の医療体制は次第に充実し、49年には狛江保健相談所が元和泉に開設、市民の健康を守る拠点としてさまざまな事業を行った。

裕次郎の来院に大騒ぎ

東京慈恵会医科大学附属第三病院(和泉本町)の話 狛江村、調布町、神代村(いずれも当時)にまたがる99,000㎡の兵器工場の跡地に、2階建て本館と平屋3棟を建築、慈恵医大附属東京病院分院として昭和25年にスタートしました。医師13人と職員43人で入院患者150人、外来患者200人の診療にあたりました。開院当時の狛江の人口は10,319人で、周りは田畑が広がっていました。近くに総合病院がなく、開院は住民に喜ばれました。また、国民健康保険制度がなく、村役場発行の診療券を持参した人には診療代の割り引きを行い、好評でした。付近には日活や大映などの撮影所が多く、石原裕次郎、岡田真澄などの映画スターも来院して大騒ぎになり、看護師は注射をするとき緊張で手が震えて困ったという



1950年ごろ
2007年
旧兵器工場の建物は結核病棟として利用され、現在は医局になっている

エピソードが伝わっています。37年に現在の名称に改められ、43年には鉄筋コンクリート造り、地下1階・地上



9階建ての現在の中央棟の建設が始まりました。ところが、ほぼ組み上がった鉄骨が6月に風速34mの暴風雨で倒壊、工期が1年延び、45年に完成しました。敷地内にはまだ戦前の兵器工場時代に建設されGHQが接收した厚い鉄筋コンクリート造りの建物が残っていて、職員は「慈恵の世界遺産」と呼んでいます。開院当時は病室でしたが、現在は医局として使っています。開院時に作られた病院から看護師寮への渡り廊下もまだ現役。以前はスレートぶきの屋根だけの吹きさらしで、冬は寒くて「シベリア街道」と職員は呼んでいたそうです。

無休で専門外も診療

近藤高潔さん(小児科医・80歳・和泉本町)の話 昭和20年8月25日に広島で原爆で被災した子どもを見たのに続いて各地で浮浪児に出会い、子どもたちの将来をなんとかしなくてはと思って、小児科医を志しました。29年9月に自宅で小児科病院を開業したのですが、昼間は大学の医局に無給医として勤め、帰ってきてから午後6時から9時まで診療しました。3DKの家に親と同居していたのですが、4畳半の部屋を



1964年
開業当時の近藤さん。往診にはオートバイを使った

診察室にし、押し入れを薬局に改造しました。開院と同時に結婚したので、忙しかったですよ。当時、市内には医者が数人し

かいなくて、多いときは40人ぐらい診察したこともあります。専門外の科目の治療も多くて、化のうした傷の切開手術では、友人の外科医に頼んで来てもらいました。ほとんどが往診で、オートバイを使ったのですが、将来を考えて、お金が少し貯まると暇をみては自動車教習所に通って普通免許を取りました。37年に大学を辞めて、狛江通りに面した場所へ移転しましたが、夜中にお母さんがはだしのまま、具合が悪くなった子をおぶって来たり、とにかく24時間、365日休む

ことがなかったですね。風邪がはやったときは、往診に回るうちに注射器が足りなくなり、医院に戻って消毒してから出直すことも珍しくなかったです。医者は健康で、勉強が好きで、患者さんへの愛情がなくてはいけません。病気をしたのをきっかけに、患者さんへの迷惑も考え、こ



1965年ごろ

市内で最初に外科開院

岩瀬彰啓さん(外科医・80歳・和泉本町)の話 大学病院に勤めていたのですが、昭和39年に結婚と同時に松原通りに面した場所に外科病院を開業しました。市内には麻酔ができる医院はなかったので、最新の機器を揃えました。当時は適正配置委員会があったのですが、市内には外科がな



1965年

患者に逃げられたり、治療代がもらえなかったり、けっこう苦労しました。川崎市多摩区の料亭で心中や自殺をはかった人がよく運ばれてきました。胃洗浄をして

骨折にめげずお産

中嶋さくさん(助産師・84歳・和泉本町)の話 昭和16年に看護婦(当時)になったんですが、赤ちゃんが好きだったので、助産婦(当時)の資格をとって26年から病院に勤め、32年に独立しました。ただ、助産婦だけでは食べていけないので、同時に狛江駅北口に文房具や雑貨の店を開業しました。



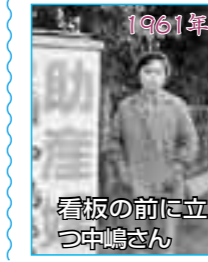
1960年
沐浴指導

そのころ市内に3人ぐらい助産婦がいたのですが、自宅で産む人が減り、病院や医院でのお産が増え始めていました。母親学級もなくて、私もお産より、産後の沐浴や授乳の指導が多かったです。産婦人科はまだ慈恵第三病院にしかなくて、34年に神保産婦人科が開院すると、よく手伝いに行きました。

んが産気づいて自宅へ呼ばれたんですが、全然準備ができてないんです。仕方なく用意をしているときに、転んで足の骨を折っちゃった。だけど、産婦さんをそのままおけないから、「私も痛いんだから、あなたも痛みを耐えてがんばりなさい」って励まして、無事乗り切りました。その後3日間、産後の世話に通ってから、ようやく自分の足の治療に行きました。開業から、4年前の最後のお産までに取り上げた赤ちゃんは300人ぐらいですが、沐浴指導や新生児訪問などで世話をした人は数千人になります。北口の再開で引越越し、いまは高齢者専用住宅に住んでいます。現在も相談を行っています。

急なお産で連絡が入って、迎えに来た救急車で産婦の家へ行ったり、なかには救急車の中で赤ちゃんを取り上げた

こともありましたよ。ぶっつけ本番で緊張しましたね。30年ぐらい前、夜、急に産婦さ



1961年
看板の前に立つ中嶋さん



1965年
隣はまだ畑が残っていた

かったのが、すぐに開院できました。田畑の中に住宅がぼつぼつ建ち始めたころでしたが、開院して2年目に野川がはんらんしました。私のところは被害を免れましたが、一面水浸しで、えらいところに越してきたと思いました。半年後に救急指定医になったのですが、建設ラッシュのころで、けんかでケガをした作業員も多く運び込まれてきて、

全員、助かりましたよ。開院して間もないころ、銀行町(東和泉)の1歳ぐらいの子が浴槽で溺れて、心肺停止の状態に運ばれてきたとき、箸より細い気管を切開して助けたことがありま

す。外科医として、いまも自慢できるエピソードのひとつです。当時は、救急指定医が少なくて、外科以外の治療もいろいろやりました。とにかく忙しくて、留守にできないから、年2回ぐらい映画を見に行くのが、唯一の遊びでした。道路の拡幅で医院を建て替えたのをきっかけに救急指定医をやめて、外来だけにしました。

写真提供・取材協力=近藤高潔さん、岩瀬彰啓さん、中嶋さくさん、東京慈恵会医科大学附属第三病院(順不同) 取材協力・資料提供=狛江市医師会